開館30周年

どこにもない美術館を目指して



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

参考資料①

ごあいさつ

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（ＭＩＭＯＣＡ（ミモカ））は、本年、開館三〇周年を迎えました。
節目にあたり、猪熊画伯をはじめ先人がミモカに託した思いを振りかえり、
ミモカがこれからも魅力のある美術館として、
市民はもとより県内外の人々に元気と安らぎを与えるものとなることを
願っています。

令和三年十一月

丸亀市
市長　松永恭二

丸亀市議会
議長　真鍋順穂

はじめに

二人はふるさとに熱い思いをもっていた。一人は丸亀市長・堀家重俊であり、もう一人はわが国洋画壇の重鎮、猪熊弦一郎である。堀家市長は昭和三八年から四半世紀にわたって市長を務め、「どこよりも住みよいまち　だれもが住みたくなるまち」を目標に、ふるさとのまちづくりにまい進してきた。その間、厳しい時代もあったが、徐々に市勢は安定して県下第二の都市になり、「住みよい快適なまち」として全国的にも高い評価を得るようになった。しかし、「住みよいまちだが、魅力に乏しいまち」との評価もあった。昭和六〇年代に入ると、夢のかけ橋といわれた「瀬戸大橋」の完成が迫り、未来を見据えた若い人にも魅力のあるまちづくりへの熱い思いがあった。

一方、猪熊画伯は幼少年期を香川県の中讃地域で過ごし、丸亀中学（現・丸亀高校）を卒業して東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学した。その後、作家として、東京、パリ、ニューヨーク、ハワイと国内外で活躍した。その七〇年に及ぶ作家生活にあって、どこにいてもふるさとは懐かしく、穏やかな讃岐に生まれたことを幸せに思っていた。そして、そのふるさとの若者や子どもたちに役立つことをしたいとの思いが年を重ねるにつれて深くなっていた。

二人のふるさとへの思いは、「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（愛称ミモカ）」となって結実し、国内外から注目される丸亀市の新しい顔が誕生した。

美術館の計画が持ち上がった当時、私は丸亀市総務部の職員として市の総合計画（長期計画）の策定にもかかわっていた。新しい魅力的なまちづくりの施策として「猪熊美術館」の建設案が浮上した。実現のためには猪熊先生の協力が不可欠であった。そこで、市長は当時の総務部長と私に実現の可能性を確かめることを命じた。その後、先生から全面的な協力が得られることになり、美術館建設プロジェクトの担当に任命された。さらに建設準備室を経て、開館後は副館長として足掛け十二年間、美術館の仕事に携わることになった。この間、先生から六年余りにわたって様々なことを教えていただいた。

本年、ミモカは開館三〇周年を迎えることになった。節目にあたり、ミモカが誕生した経緯やミモカにまつわる先生の話を記した。

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

館長　長原孝弘

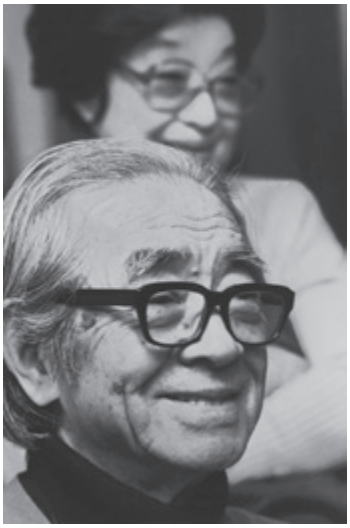


猪熊弦一郎《題名不明》1993年

美術館設立によせて

私が少年時代を過ごした、想い出深い丸亀の地に美術館が建てられた事を大変嬉しく思います。現代美術を専門に展示する美術館は、全国的にもユニークであり、丸亀市民の皆様の力で建設されたこの美術館によって、まち全体が文化的な環境になっていくことを期待しています。

猪熊弦一郎　１９９１年



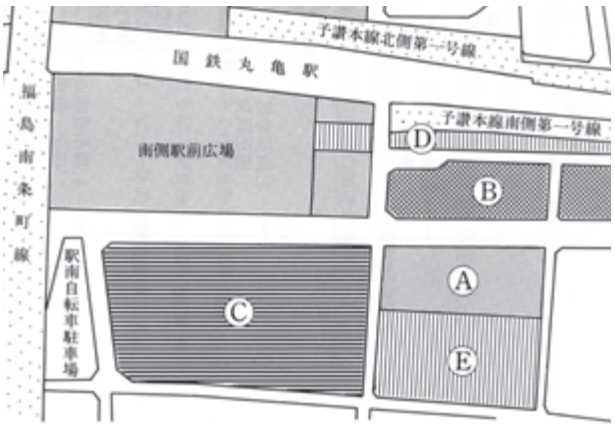
目次

瀬戸大橋時代のまちづくり　6
丸亀市の美術館計画　7
猪熊先生を訪ねる　7
猪熊先生の日記　9
「猪熊美術館」と金子知事　9
「猪熊美術館」の実現に向かって　10
猪熊先生と丸亀市長の会談　11
猪熊記念美術館の発表　13
美術館建設懇談会　13
どこにもない美術館　14
市民ギャラリー計画　15
猪熊先生と建築　16
画家と建築家の共同作業　16
壁画「創造の広場」　17
「ゲタ」のモニュメント　19
子どもを大切にする美術館　20
美術館と周辺の都市デザイン　22
美術館の完成と周辺の事業　23
先生の作品などの寄贈　24
美術館の運営と財団の設立　25
三つの美術館の不思議な縁　28
心友イサム・ノグチ　30
イサム・ノグチさんの計画　33
猪熊先生の最後の五日間　34
全国の美術館ベスト五位　37
美術館の沿革　40
美術館の受賞歴　40
猪熊弦一郎先生のこと（年譜）　42
建築家・谷口吉生さんのこと　50

瀬戸大橋時代のまちづくり

１９８０年代後半（昭和六〇年代）、香川県はかつてない変貌の時代を迎えていた。夢のかけ橋といわれた瀬戸大橋の完成が迫り、四国横断自動車道の建設、新高松空港の開港など新しい高速交通時代の幕開けともいえる大型プロジェクト事業が進んでいた。周辺の都市にとって瀬戸大橋時代に対応したまちづくりは喫緊の課題であった。丸亀市の最重要施策は国鉄の鉄道高架事業に合わせたＪＲ丸亀駅周辺の再開発事業であった。駅前広場を囲むように南と東にＡ～Ｅの五街区の再開発事業が計画されていた。１９８７年（昭和六二年）一月、Ａ地区に再開発準備組合が設立され、続いて駅正面の最も面積が広いＣ地区に準備組合が設立された。鉄道高架事業や新丸亀駅舎の改築は国、香川県、本四公団がそれぞれ担っており、駅周辺の再開発事業は民間の組合による事業であった。丸亀市はそれぞれの事業に様々な形で関わっていたが、関連する駅前広場と駅前地下駐車場の整備は丸亀市単独の事業として進めていた。これらの事業が完成すれば駅周辺の中心市街地が一変するものであった。当時の丸亀市は比較的恵まれた財政環境の下で、上下水道、道路などの都市基盤の整備に力を入れていた。また、福祉や教育環境も充実しており、「住みよい快適なまち」として全国的に高い評価を受けていた。一方、「住みよいまちであるが若者を引き付けるような要素の乏しいまち」という評価もあった。このため県下第二の都市として、若い人にも魅力のあるものが必要だとの思いが市長と市議会の中にあった。丸亀駅周辺の再開発事業も商店街にかつての賑わいを取り戻すための施策であった。

丸亀市はかつて丸亀城の城下町として、また金毘羅参りの港町として栄えた歴史と文化の蓄積があり、それが丸亀市の魅力となっていた。そこで、丸亀城を中心とした伝統的な文化に加えて、若い人にも魅力を感じてもらえるような「丸亀市の新しい顔となる文化施設」を整備し、「新旧の文化が調和した特色のあるまちづくり」を目指すことになった。



JR 丸亀駅周辺再開発計画図

丸亀市の美術館計画

丸亀市が新しい文化施設を模索していたころ、庁内の職員がまちづくりについて議論をしていて、旅行雑誌に掲載された東北・酒田市の土門拳記念館（写真美術館）のことが話題になった。そのうち、議論は丸亀市の美術館計画のことになった。

丸亀市の美術館計画は１９８１年（昭和五六年）に策定された長期計画（総合計画）で、「歴史的伝統と近代的な文化を統合した個性あふれる芸術文化の創造のため、芸術文化施設を整備する」という基本方針に基づき、美術館の整備が重点事業のひとつとなっていた。さらに、瀬戸大橋の開通を目前にした１９８６年（昭和六一年）に策定された総合計画・後期基本計画では、美術館計画の具体的な内容がそれまでの県立美術館を誘致することに加えて、市立美術館の建設について調査、検討することが追加されたが、収蔵品の問題など実現のハードルは高かった。

職員の美術館の議論は盛り上がり、「地元の丸亀中学（現・丸亀高校）を卒業して、国内外で活躍している猪熊先生の美術館ができたら、特色のあるものになるのではないか」という話にまで発展した。そこで、先生について調べると、１９７９年（昭和五四年）に日本経済新聞に連載された「私の履歴書」などによって、丸亀市とゆかりが深いことや幅広い活躍などが詳しく分かった。まるで雲をつかむような話ではあったが、最終的に、先生の協力が得られたら、美術館ができるかもしれないということになった。そこで、市長は総務部長と私に実現の可能性を確かめることを命じた。

猪熊先生の意向を伺うための手立てを探したが、紹介してもらえる人は容易に見つからなかった。そんなとき、庁内の文化担当職員から「画人・白石重忠先生」という冊子を見せられた。内容は教え子が恩師の一代記を著して九〇歳のお祝いに贈ったものだった。その冊子に猪熊先生のことが書かれていた。白石先生は猪熊先生の「私の履歴書」にも出てくる丸亀中学時代の恩師であった。

数日後、丸亀市の広報誌に「九〇歳を超えた今も元気に活躍している画人」として紹介されている白石先生の記事を見つけた。先生はご健在で、すぐ近くに住んでおられたのだ。不思議な巡り合わせであった。

広報の担当者に紹介を頼み、丸亀城近くのお宅を訪ねた。白石先生は九〇歳を超えているとは思えぬお元気さで、「猪熊美術館」の話をすると大層喜ばれ、猪熊先生宛の紹介状をその場で書いて下さった。

猪熊先生を訪ねる

猪熊先生のお宅に電話をして用件を伝えると、突然の

依頼にもかかわらず、会ってくださるとの返事をいただけた。訪問前日に市長から先生宛の書簡を渡され、「よく説明をして話を伺ってきてほしい。くれぐれも失礼のないように。」といわれた。

１９８７年（昭和六二年）二月一五日、白石先生の紹介状と市長の書簡を持って、部長に随行して東京・田園調布のご自宅を訪ねた。探し当てたお宅は白いモダンな建物で、黄色の玄関ドアと大きなオリーブの木が印象的だった。階段を上がり二階の部屋に通された。先生はかくしゃくとされていて、穏やかな雰囲気に緊張が和らいだ。丸亀市周辺の状況や目指すまちづくりなどについて説明し、新しいまちの顔として先生を記念する美術館を建設したいとの思いを話した。じっと聞いておられた先生がまずいわれたのは、「美術館は経済的には成り立たない、いわば道楽息子のようなもので、お金は出ていくばかりです。経済的なことを考えるなら止めておきなさい。芸術や文化は経済とは最も遠いところにあって直ぐ、目に見えて結果が出るようなものではありません。しかし、その波及効果には計り知れないものがあります。特に、子どもや若い人に及ぼす影響は限りなく大きなものです。」と。また、「美術館は襟を正すようなところではなく、人々が生活する街の中にあって、エネルギーを与えるところです。子どもや若者、買い物帰りの主婦など



東京・田園調布の猪熊先生宅のリビングルーム

が気軽に訪れる、『難しくない美術館』、『まちと一体になった楽しい美術館』が本当の美術館だと思います。」といわれ、さらに、「美術館は病院のような役目をするところ、教会のように人々の心を癒すところです。」、「絵を見るだけでなく、美術館のいい雰囲気の中でお茶を飲んだり、お喋りをしたり、椅子に腰かけてボンヤリと過ごしたり、いい音楽を聴いたり、人々に癒しと元気を与えるところです。」とも。私たちはそれまで美術館にふさわしい場所は郊外や静かな公園の中だと考えていたので、訪問にあたっても、場所の話が出た場合のことも考えて、丸亀城の周辺や郊外の公園などの資料を持参していた。しかし、「美術館は人々が生活する街の中に」という先生の話を聞いて資料はそのまま持ち帰った。先生はニューヨークやハワイでは日常的に画廊や美術館を訪れていた話もされ、ニューヨークでは建物にも興味があったといわれた。また、国内の美術館のことや個人美術館を造ることの難しさまでいろいろなことを実によく知っておられた。また、故郷香川への思いを話され、故郷の子どもや若い人のために役立つことをしたいとの思いがあるとも。

初対面にもかかわらず、長時間にわたって熱心に話をしていただいた。先生の様々な話に感動したが、美術館実現の難しさや課題も分かったように思えた。

猪熊先生の日記

先生のその日（二月一五日付）の日記には、「**私の美術館に付いての問題はまったく有難い話である**」、「**美術館についてのむつかしさ、又やるならこんな風にと色々と私の意見を述べる**」、「**本当にうれしい事、幸福な話である。とっくり考えねばならない**」と記されている。

「猪熊美術館」と金子知事

先生は丸亀市との話をはじめる前に確かめたいことがあるといわれた。それは香川県のことについてである。先生と香川県の金子正則元知事は丸亀中学の同窓で、長く深い交流があった。金子さんは先生の画業はもちろん幅広い活動や人柄、さらに香川県への様々な貢献を高く評価し、予てから先生を顕彰する施設ができることを願っているといわれていた。先生もそのことを感じていて、金子さんが知事を退任して久しいが、その後、香川県ではどのような状況になっているかを知りたいと思われた。そこで、人を介して確かめられたが、実現の可能性が低いことが分かった。そのことについては、先生が亡くなった後、金子さんが何度かミモカを訪れたが、ある時、「**猪熊さんの美術館は香川県のどこにできてもよかったんだ。堀家（丸亀市長）さんの英断ですばらしい美術館ができて本当によかった。こんなにうれしいこと**

はない。」といわれた。それを聞いて、金子さんの猪熊先生に対する熱い思いと「猪熊美術館」の実現を願っていたことを知った。

「猪熊美術館」の実現に向かって

「猪熊美術館」が実現するためにはクリアすべき課題が三つあった。一つは猪熊先生の協力が得られること、二つ目は建設財源の目途が立てられること、そして三つ目は建設用地を確保できることであった。

最も重要な猪熊先生との協議は、はじめて訪問して以降、先生がハワイに滞在中も書簡を送るなど丸亀市の状況を定期的に伝えた。このころ、丸亀市の文化部門は教育委員会の所管であったことから教育長も先生との話し合いに加わった。初訪問から五か月後の七月、先生から連絡があり、教育長と部長に随行して田園調布のお宅を訪ねた。奥様も同席されていて、お二人から、「美術館は造るのも大変ですが、運営するのはもっと大変なことです。それを承知で他にないような、いい美術館を造ろうとお考えなら、前向きに考えたいと思います。」という話があり、先生の協力が得られる可能性が出てきた。

建設財源については、当初、猪熊先生に意向を伺うにあたって、もし建設が可能になった場合には丸亀競艇事業の収益金を財源にすることが考えられていたが、実現する可能性が出てきたことから、改めて財源の目途をつけることになった。このころ、丸亀競艇は担当者の積極的な事業展開によって売り上げが伸びていて、責任者である第二助役から今後、大幅な増益が期待できるとの見通しが示された。結果は見込みどおりに美術館の建設が決定した翌年から建設がほぼ終わるまでの三年間の収益金総額は、それ以前の三年間に比べて二倍近く増加し、建設の財源を確保することができた。また、市の主要な財源である市税収入が順調に伸びていたことから、美術館の建設が他の事業に影響することはないと判断された。

建設用地については、猪熊先生をはじめて訪問する三か月前に市内の篤志家の婦人（故藤井久美氏）から丸亀市に遺贈された土地（約五百坪・評価額約一〇億円）があった。そこは新しく整備されるＪＲ丸亀駅に近く、駅前広場の一角にある旧国鉄の貨物ヤード跡地に隣接する土地であった。貨物ヤード跡地は駅周辺の再開発区域には含まれていなかったが、駅前整備にとっては重要な場所とされていた。このため、丸亀市の総合計画（長期計画）でも貨物ヤード跡地の有効利用が重点事業となっていた。この地区に美術館が建設できれば、「美術館は市街地に」という猪熊先生の考えに沿うことができ、駅前広場の整備にとっても有効なものになると同時に、国内初の駅前美術館として新しい丸亀の顔になると考えた。

さらに、周辺で計画されている再開発事業の先導的な役割を果たし、相乗効果も期待できた。遺贈された土地と国鉄清算事業団が所有する貨物ヤード跡地のほか映画館跡地や複数の地権者が所有する土地があって、全体で美術館建設候補地となった。また、地権者のものでない荒れたお堂や大型の墓石があった。用地の確保についても総務部長と私が担当することになった。

当時、清算事業団は旧国鉄資産の処分を急いでいたが、全国的な地価の高騰が社会問題化し、入札処分が凍結されていた。そのため随意契約による地方自治体への売却についても慎重で、払い下げの申請から最終の契約までに少し時間を要したが取得することができた。その他の用地についても土地収用事業の認定手続きやお堂の処分、墓石の移転などを行い取得していった。その過程では、地権者との交渉のほか関係機関への様々な手続きもあったが、同僚の支援によって、用地を確保することができた。



正面左手は旧貨物ヤードの建物、右手前は遺贈された藤井邸

後年、完成した美術館が優れた建物として高い評価を得ることになるが、その要因のひとつはこの敷地の選択にあったといわれている。

猪熊先生と丸亀市長の会談

建設用地の取得に見通しがついたことから、1987年（昭和六二年）一〇月八日、堀家市長が猪熊先生を訪ねた。初対面ながら丸亀中学の先輩、後輩の間柄で、先生が小学生のころ住んでいた家のすぐ近くに、かつて市長も住んでいたことから昔の丸亀の話で盛り上がった。話が一区切りついたところで、市長から丸亀市周辺の状況や自分が目指しているまちづくりについて説明し、「丸亀市の新しい顔となるような特色のある美術館として、先生の名前を冠した美術館を是非とも建設したい。」と協力を求めた。また、建設の候補地として丸亀駅前を考えていることも話した。それをじっと聞いておられた先生は、市長が話し終えると立ち上がって手を差し出した。おくれて立った市長の手を両手で握り、「**市長さん分かりました。どこにもないような、世界に通用するような美術館を造りましょう。私も微力ながら喜んで協力します。どうか、中途半端でないよいものを造って下さい。**」といった。さらに、「美術館の建物はそれ自体がひとつ

の芸術作品になるようなものにすべきで、建築家が大事です。」といわれ、「私も多くの優秀な建築家と交流があるが、今度の美術館は若い人にも魅力のあるまちづくりを目指している丸亀市にふさわしい、将来性のある建築家を選ぶべきだと思います。そこで、米国のハーバード大学建築学科を首席で卒業し、美術館などの設計で実績と受賞歴のある建築家の谷口吉生君を推薦したいのでお考え下さい。」との話があった。後日、谷口さんに設計を依頼することになった。この日の会談で基本的なことが話し合われたが、先生からは所有する多数の作品や資料をすべて丸亀市に寄贈する旨の話があった。

先生は後に、その日のことについて、「市長さんの話を聞いて、どうするか決めようと思っていた。」といい、堀家市長の印象を、「丸亀の知人から聞いていたとおり、ざっくばらんで知ったかぶりをしない誠実な人だと好感が持てた。また、丸亀のまちをよくしたいという情熱を感じた。」そして、「美術館をお城の中や周辺でなく、街の中、それも駅前に建てると聞いたとき、自分の考える理想の美術館だと思い、作品や資料をすべて寄贈する気持ちになった。」といわれた。一方、市長は「立派な素晴らしい感覚を持った先生がこんなに喜んでおられるのだから、きっとどこにも無いような美術館ができると胸の熱くなるのを覚えた。あの握手は生涯忘れることのでき



1988年　猪熊先生と堀家市長（市長室）

ないものになった。」と私たちに話した。

猪熊記念美術館の発表

猪熊先生の協力が得られることになり、用地の目途もついたことから、１９８７年（昭和六二年）一〇月二四日、丸亀市議会の全員協議会でこれまでの経緯を報告して、猪熊先生を記念する美術館をＪＲ丸亀駅前に建設することを提案し、了承された。また、この事業を市制施行九〇周年の記念事業とすることも了承され、報道機関に発表した。

美術館建設懇談会

先生と市長の合意に基づいて基本構想を策定するため、１９８８年（昭和六三年）一月、市長の諮問機関として美術館建設懇談会が設置され、議会、市民の代表、学識経験者あわせて十三名の委員が委嘱された。初会合で市長は、「私はこれまでハード面に重点を置いてまちづくりをしてきたが、これからは文化、ソフト面にも力を注いでいきたい。『猪熊美術館』はその契機となるものです。」とあいさつをした。

懇談会は二月から七月まで四回開催され、様々な意見が交わされた。美術館の名称は「猪熊弦一郎記念美術館」として提案された。先生と市長の話し合いのなかで、他の作家の作品も紹介する企画展示室を設けることが決まっていたが、その後、先生から新しいものを積極的に紹介する美術館であることを明確にしたいので「記念美術館」でなく「現代美術館」にしてほしいとの要望があり、懇談会に諮られた。現代美術館とすることについて、学識経験者として参加していた大原美術館の藤田慎一郎館長と京都国立近代美術館の小倉忠夫館長から「猪熊先生の考えはすばらしい。ほとんどの作家は自分のための美術館を希望するものだ。それを自分の作品だけでなく他の作家、それも現代美術を積極的に紹介する美術館にしたいという。先進的な試みである。しかし、難しいことでもある。丸亀市はそのことを十分認識し、覚悟も必要である。」との話があった。当時、美術館名に「現代」を冠していたのは、建設途中であった広島市現代美術館（１９８９年オープン）だけであった。懇談会としては先生の考えを尊重することで意見が一致した。後に、名称は「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館」となり、「個人美術館」と「現代美術館」の二面性を持つ、国内初の美術館となった。

懇談会には美術館に精通した二人の美術館長も参加されていたが、両館長が猪熊先生と直接意見を交わす機会が持てなかったこともあって、美術館の各施設については他の公立美術館に準じた内容で市長に答申された。懇

談会の答申を受けて基本構想案を市議会の全員協議会に提示し、了承された。同年九月、谷口建築設計研究所に基本設計を依頼した。

どこにもない美術館

基本設計を発注して約二か月後の十一月三日、香川県の文化功労者の受賞式に出席されていた猪熊先生から連絡があり、教育長と部長に随行して宿泊先のホテルに伺った。先生と後に美術館の相談役になる荒井茂雄さんがおられた。先生の用件は「谷口君が描いた図面で美術館について説明を受けたが、不本意なことがあるので丸亀市の考えをお聞きしたい。」ということであった。先生は、まず、「美術館の周辺で計画されている図書館や地下駐車場、駐輪場などの工事で美術館が色々と制約を受けるようで、美術館の大事なものが薄れてしまうことを危惧している。」といわれた。さらに、「丸亀の美術館は他の美術館の手本となるような、また世界にも通用するようなものを目指していると思っている。その美術館に一般の市民が自分たちの作品を気軽に発表する市民ギャラリーを造る計画になっているが、それは問題だと思う。より高度のものを目指している今度の美術館は、美術館にかかるものはすべて厳選されるべきであって、活動や展示される作品はもとより、コーヒーショップやミュージアムショップの内容に至るまですべてについて美術館が目指す方向と同一の考えに貫かれたものでなければならないと考えている。展示室を一般に開放したり市民ギャラリーを設けたりすると特徴のある美術館でなく、他と同じような美術館になってしまう。」、「市民の発表の場を造ることは非常に大事なことで、丸亀市としては必要なものであるが、それは今度の美術館とは別のところに造るべきだ。」といわれた。

そして、「市長さんがどこにもない、いい美術館を造るといわれたのでその考えに賛同して協力することにしたもので、私が美術館を造ってほしいとお願いをしたのではない。」、「普通の美術館にしたいと考えられるのであれば『猪熊弦一郎』をはずして『丸亀市立美術館』にしてほしい。その場合、私の作品を何点か寄贈するので美術館の中に『猪熊コーナー』を造ってくれればよい。」という話であった。予期しないことであった。

先生も市長も「どこにもない美術館を造りたい」という思いは同じであった。丸亀市は、先生ひとりの画業を通して、具象から抽象へという日本の近代から現代までの美術のプロセスがわかる多彩な作品群と駅前の立地があれば「どこにもない美術館」ができると考えた。しかし先生から、それだけでは「普通の美術館」になってしまうといわれたのである。先生が目指していたのは、建

物も運営もすべてのことについて厳選されたものを提供する新しい形の美術館であった。先生の美術館に対する深い考えと強い思いを知ることになったが、丸亀市の覚悟が問われることでもあった。

先生からの申し出を聞き、設計者の谷口さんから話を伺うと同時に、建設懇談会の委員であった大原美術館の藤田館長、京都国立近代美術館の小倉館長にも意見を伺った。谷口さんからは「猪熊先生は知識が豊富で建築のこともよくご存じである。高齢ではあるが、頑固ではない。説明をすれば分かってもらえることも多い。美術館周辺の問題は設計の中で理解してもらえるように考えたい。ただ、自分の作品だけでなく他の作家の質の高い現代美術を紹介する現代美術館にすることと、すべてが統一されたコンセプトに基づく新しい形の美術館にすること、この二点は譲れないと考えておられる。」との話があった。また、専門家である藤田館長と小倉館長からは「猪熊先生がそこまで考えておられることに敬服する。美術館の建物、作品、運営がひとつのコンセプトに基づいているというのは理想の形である。国内にはこれまでに例がないと思う。丸亀市が先生の考えにそって美術館を造り、運営するのであればすばらしいことだ。」との意見があった。市長としては、もとより猪熊先生の意向にそって建設を進めることにしており、そのことを市議会にも説明して了承されていた。そこで、周辺問題は設計者の谷口さんに対応をお願いし、それ以外のことについては先生の考えを尊重して進めることにした。

市長は再度、先生を訪ね、「新しい形の美術館」を目指して、質の高い現代美術の展覧会を積極的に行うこと、市民ギャラリーは他の場所に設置すること、展示室の一般開放や貸出はしないことを説明し、美術館の運営も先生の考えにそって行うことを伝えた。

市民ギャラリー計画

市民ギャラリーの整備は総合計画の後期基本計画において、美術館の整備とは別に重点事業として追加され、１９９０年（昭和六五年）までに完成させる計画になっていた。設置場所については総合計画の審議会において、駅前再開発事業の中で推進することが求められたことから、駅前C地区のビルに設置することになっていた。その後、美術館の基本構想を策定する段階で、他の市立美術館に倣って美術館内に設置するように変更したが、猪熊先生の考えや専門家の意見を聞いて、市民ギャラリーの場所は再び変更され、元の再開発ビルに戻ることになった。当時、美術団体の要望も場所のこだわりよりも、十分な展示面積を確保してほしいというものであった。

１９８９年（平成元年）二月、基本設計案を市議会の

全員協議会に提示した。

市民ギャラリーの構想を変えたので、それに伴って基本設計の一部を変更したことを説明した。あわせて、開館後の美術館の運営について、先生の考えを説明した。いずれも了承された。

その後、駅前C地区の再開発事業が着工されなかったことから、再開発ビルに計画していた市民ギャラリーは、生涯学習センターに設置されることになった。

猪熊先生と建築

猪熊先生は画業以外にも様々な分野で活躍されたが、建築にも興味や憧れを持っていた。建築雑誌「新建築」を愛読していた。「もっとも優れた芸術は建築である」といわれ、多くの建築家と交流があった。1949年（昭和二四年）には、猪熊先生が仲間と設立した新制作派協会に、親交のあった建築家・山口文象さんとともに、建築部（現・スペースデザイン部）を創設することを働きかけ、自ら会員を集めた。当時、美術団体に建築部門を設けるのは、画期的な試みであった。創設メンバーには谷口吉郎さん、前川國男さん、吉村順三さんなど日本を代表する優秀な建築家が揃っていた。先生は彼らと協働して建築と融合した壁画の制作など様々な活動を行った。メンバーの中に、後に「世界のタンゲ」と呼ばれるようになる丹下健三さんもいた。先生は丹下さんの才能を早くから見抜いていて、親交のあった香川県の金子知事に丹下さんを県庁本館（現・東館）の設計者として強く推薦し、県庁本館を丹下さんが設計することになった。県庁本館は戦後モダニズム建築の代表として高く評価されるものになった。そのエントランスホールには金子知事に依頼されて先生が制作した壁画「和敬清寂」がある。



現・香川県庁東館ロビー陶画《和敬清寂》（猪熊先生作，1958 年）

その県庁東館は本年、ニューヨーク・タイムズ発行の雑誌の企画「世界で最も重要な戦後建築二五作品」に、日本で唯一選ばれ、丹下作品の最高傑作だと高く評価された。また、猪熊先生の壁画についても、「丹下の整然としたデザインに、色と曲線をもたらしている」と評価されている。

画家と建築家の共同作業

個人の名前を冠した美術館の多くは、画家が亡くなっ

た後に建てられている。しかし、ミモカは第一線で活躍し、建築にも造詣の深い画家と美術館などの設計で実績のある建築家が共同で美術館を造った特異なケースである。

先生は美術館の設計にあたって、谷口さんに、「**周辺の街と一体化させること**」、「**おおらかな空間をつくること**」、「**子どもたちの感性が育つ場所にすること**」の三つを希望した。その望みは見事にかなえられ、ミモカの高い評価につながった。

建築の設計は先生と谷口さんの度かさなる対話をもとに進められたが、二人の対話は作品と展示空間の関係に始まり、壁画やオブジェと建築の関係、さらにマーク類のデザインから家具類の選択まで多岐にわたった。先生は自分にできることは大きな壁画から小さな洗面所のマークまで積極的に手伝ったが、谷口さんとの関係については、「谷口君とは色々なことでディスカッションしたが、彼は物を造る人だ。だから、細かなことはいわないようにした。」と話していた。

先生は様々な対話の結論を谷口さんに任せ、谷口さんは先生の作品や思いを生かすこと、さらに自分の作品として建物を表現することに心血を注いだ。

谷口さんは「作品は建築によって引き立てられ、建築は作品によって美しさが与えられる。」と語っているが、完成した建物は画家の感性と建築家の妥協のない綿密に計算されたディテールが相まって、芸術性の高い建物になった。画家と建築家の対話をもとに造られた美術館は高く評価され、優秀な建築として、「ＳＤＡ（サインデザイン）賞」、「ＢＣＳ（建築業協会）賞」、「村野藤吾賞」、「公共建築賞・特別賞」と多数の賞を受けている。

壁画「創造の広場」

設計者の谷口さんは美術館のファサード（建物正面）を美術館のサインにすると同時に、駅前広場の一画を構成する重要な要素にしたいと考えた。建物の正面を絵の額縁のような大胆なデザインにして、そこに壁画を配置することを考え、猪熊先生に原画の制作を依頼した。

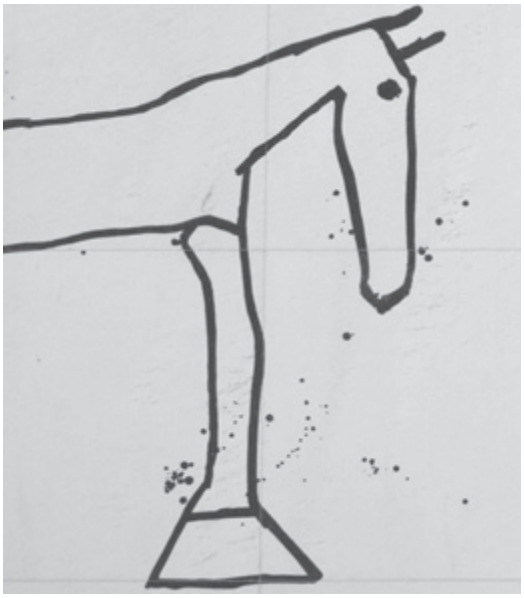
先生は、「壁画は訪れる人が美術館は楽しく、気軽に利用できるところだと思ってくれるようなものであって、現代美術館の顔になるようなものにしたい。」と考えた。

壁画には多くの馬が描かれ、ヘリコプターや自動車もあるが、馬や乗り物そのものを描こうとしたのではなく、生き物の代表として生き物の中で姿が一番美しいと思っていた馬や、子どもや自分も大好きな乗り物を○×と同じような抽象形態の集合体として使って、親しみやすく温かさのある作品にしたいと考えた。

先生は壁画について、「子どものいたずら書きのように描いた。子どもたちが壁画を見て、ボクにも描けると思って親しみを持って美術館に来てくれたらうれしい。」と話されたが、工事中、完成した壁画の一部が前の広場から見えるようになったとき、市民から「立派な美術館ができているのに、早くも誰かが落書きをしています。」という電話がたくさんかかってきた。先生にそのことを話すと、「大成功だ。」と大笑いされ、「みんなが美術館は敷居の高くない、入りやすいところなんだと思ってくれたらいい。」といわれたが、「壁画はあくまで自分の作品になっていなければいけないと考えていた。」とも。

壁画の制作はスケッチブックに描かれた原画を原寸大（タテ約十二メートル、ヨコ約二二メートル）に拡大したものを体育館の床に広げ、先生はそれを下書きにして、力強い線になるように極太の筆で絵を描き起こしていった。時々、建築用のリフトに乗って全体を確認しながら仕上げた。すべて描き終えると筆に墨を含ませ、完成した絵の所々に「パッパッ」と筆を振った。大小の墨の粒が画面に飛び散った。計算された構図の上に偶発的なものを加え、ひとつの作品として仕上げられた。





MIMOCA 壁画《創造の広場》

壁画は精密な技術で造られている。まず、原寸大の絵を厚いゴムのシートの上に置き、忠実に絵を切り抜く。次に、切り抜かれたゴムのシートを白い大理石に乗せて、高圧で研磨剤の砂を吹き付けて絵を彫り込み、彫られた窪みに黒い御影石が埋め込んである。象嵌（ぞうがん）の手法である。よく見ると転々と飛び散った五ミリほどの小さな墨の跡にも丁寧に黒い石が埋め込まれている。壁画の工法にも谷口さんの強いこだわりが感じられる。

谷口さんは美術館の正面を重要な場所と考えたが、先生も壁画を含む正面の広場をミモカのコンセプトを象徴する大切な場所と考えていた。

先生は、「人々がこの広場に立ったとき、空間の広さと美しさを感じて、それぞれの人に新たな創造の意欲が湧き出るような場所にしたかった。」と話し、壁画の名称を「創造の広場」とした。

「ゲタ」のモニュメント

先生は美術館のために「ゲタ」のモニュメントと五つのオブジェをデザインした。

エントランスの二階展示室に通じる階段のわきに、「GETA（ゲタ）」と名付けられたモニュメントがある。大人の背丈ほどの円筒形のモニュメントで、透明なシリコンの中に鼻緒のないプラスチック製の黄色いゲタが水に浮いているように封じ込められている。モニュメントの前には**「ぼくが小学校のころ、流された下駄を追って土器川で溺れかかった時、助けてくださったおじさんに捧げるモニュメント。」**と先生の解説がある。

美術館計画に先生の協力を得られることが決まったころ、東京に帰る先生を岡山空港に送る車の中で、丸亀市に協力しようと決められた訳を尋ねたことがある。先生は、「いい美術館を造りたいという市長さんの熱意に賛同したことが大きいが、丸亀に恩返しをしたいと思った。」といわれ、「丸亀の城北小学校一年の夏の夕方、友だちと近くの土器川にホタル狩りに行って遊んでいるうち、石につまずいてゲタを流し、それを追っかけていくうちに深みにはまって溺れ、気を失った。気がついたのは、アメ湯売りのおじさんに足を持って引っ張り上げられ大量に水を吐いたときで、あのときおじさんが助けてくれなければ今の自分はないという思いがずっとあった。丸亀に美術館を造ることでその恩返しをしようと決めたんだ。」と話された。「ゲタ」のモニュメントには先生の感謝の気持ちが込められている。

美術館前の広場には先生がデザインし


MIMOCA 《GETA》のモニュメント


城北小学校近くの土器川（現在）

た三つのオブジェがある。赤色の「四つの生命」、黄色の「星座」、黒色の「シェルの詩（うた）」である。これらの作品は壁画とともに、人々に活力や安らぎを与える現代美術館の顔となっているが、子どもたちが親しみを感じられるものになることも考えていた。黄色の「星座」は、子どもたちが腰かけたり、またがったりすることも想定して造られている。また、大階段の二階踊り場には、「草」と名付けられたオブジェが、さらに三階の滝のある広場（カスケードプラザ）には黄色の「トライアングル・アンド・レインボー」がある。それぞれの作品は建物と一体になって、人々に安らぎを与えるものとなっている。

子どもを大切にする美術館

「子どもたちを大切にする美術館」はミモカの柱のひとつである。猪熊先生は子どもたちのことをいつも気にかけていて、子どもたちが感性の豊かな人間に育つことを願っていた。先生は**「子どもたちが美術館の活動を通して美しいものがわかり、新しいものに共感できるような豊かな感受性と優しい気持ちを持った人に育ってほしい。」**、**「美しいものがわかる、そういうことから友達や周りの人を愛する心が生まれてくる。」**といわれ、美術館の設計や運営に子どもたちへの配慮を強く希望した。設計者の谷口さんにも当初から「子どもたちの感性が育つような場所にしてほしい。」と要望していたが、それを実現するための場所のひとつが「造形スタジオ」である。先生がモデルにしたのは、東京・渋谷の青山通り沿いにあった「こどもの城」である。「こどもの城」は児童の健全育成のための施設で、正面に岡本太郎のシンボルモニュメント「こどもの樹」があり、子ども専用の劇場や体育施設のほか創作や音楽の部屋があった。その創作の部屋の名称が「造形スタジオ」で、ミモカはその名称と役割を手本にした。「こどもの城」のように児童を対象に建てられた施設ではない美術館に子ども専用の部屋が造られるのは当時、珍しいことであった。

子どもたちに表現し、創作することの楽しさを知ってもらうことを目的に造られたミモカの造形スタジオでは、これまでに延べ五万人を超える子どもたちがワークショップなどの活動を行ってきた。

また、運営面で配慮されたのが「観覧料の無料化」である。「子どもたちが気軽にミモカに来られるようにしてほしい。」という先生の希望で、当初から小学生以下の観覧料を無料にし、約四年後からは高校生以下を無料にした。当時、全国的にも珍しいことであった。その後、ミモカの取り組みが徐々に広がり、現在、香川県内ではほとんどの美術館などで高校生以下が無料になっている。







ワークショップ「猪熊先生をかこう」(1991 年)





上：夏休みワークショップ「パラモデル共同制作所」
(2008 年)
下：ワークショップ「カタチ発見！顔ワールド」(2007 年)

先生は亡くなる直前のスタッフへの話でも子どもたちのことに触れ、「**子どもたちのためにいろいろな活動をすることは、すぐには目に見えなくても将来にかならず花が咲く。**」といわれ、スタッフを激励された。

美術館と周辺の都市デザイン

ほとんどの美術館は自然が豊かな場所にあるが、ミモカは市街地の新しく整備される駅前地区に建設されることになった。設計者の谷口さんは敷地と建築の関係は一番大事なことだと考えていた。そこで、建設場所の地域性を生かして、美術館だけでなく駅前広場を含めた周辺を一体的にデザインすることを丸亀市に提案した。当時、建物を含めた周辺地域をひとつのコンセプトでデザインすることの重要性は十分に認識されておらず、各事業はすべて縦割りで行われていたが、提案は新しく生まれ変わる駅周辺にふさわしいものになると判断され、広場周辺の総合的なコーディネートを日本都市総合研究所の加藤源さんに依頼した。

加藤さんは東京大学や米国・ハーバード大学で都市デザインを学び、丹下健三都市・建築設計研究所で実践を積んだ後、独立して多くの都市開発を手掛けている都市設計の第一人者であった。加藤さんによって丸亀市、谷口さんをはじめJR、本四公団や再開発事業関係者など関係する事業者間の調整が図られることになった。また、駅前広場と美術館の外構の設計者として、ハーバード大学の教授でもあったピーター・ウォーカーさんが選ばれた。

ウォーカーさんは当時、日本ではまだ馴染みのなかったランドスケープアーキテクト（景観のデザインに加えて、利便性や快適性などを追求した空間設計を行う専門家）の第一人者で、米国はもちろん日本においても多くの実績があった。

加藤さんはウォーカーさんに駅前広場は丸亀市の新しい顔になること、周辺と一体になってひとつのコミュニティー・スペースを構成していること、さらに、市民の自由な使い方を誘発する空間にしてほしいことなどを伝えた。加藤さんはこれまでの「均一化された車のための駅前広場」ではなく、「人の



JR 丸亀駅前広場（設計：ピーター・ウォーカー）

集まる広場」にしたいと考えた。

ウォーカーさんは鉄道の高架や道路で切断される各施設の全体性を表現するとともに、種類の異なる空間を接続させる効果を考え、敷地全体が大きなストライプを描くようにデザインした。また、将来的にストライプが駅前から市街地にも及んでいくことも想定した。そのため一部をアスファルト舗装にして材料も高価でないものを使っている。また、広場のアクセントとして水が流れ落ちるフレームオブジェとスパイラルに配したグラスファイバー製の岩が配置された。

美術館の設計も駅前広場との関係性を重要視して、外構だけでなく、美術館のファサード（建物正面）も美術館のサインであると同時に駅前広場を中心とする空間のアクセントにした。また、駅前広場が美術館のエントランスから大階段を貫通して三階の滝のある広場まで続いているように設計されている。１９９０年（平成二年）この丸亀駅周辺市街地活性化事業は、建築と都市設計の共同作業による魅力的な駅前広場として高い評価を得て、第二回全国街路事業コンクールで建設大臣賞を受賞した。

周辺の再開発事業が未着工に終わったことで駅前広場も計画されていた完成形とはならなかったが、駅前広場と美術館の一体化が図られ、駅前は「人の集まれる広場」になった。

美術館の完成と周辺の事業

美術館の建設は１９８９年（平成元年）十一月、工事に着手し、十二月に起工式が行われた。

美術館の建設と同時期に進行していた周辺事業は美術館着工前年の１９８８年（昭和六三年）三月に鉄道高架事業が竣工し、新丸亀駅舎の完成式が行われた。さらに、四月には瀬戸大橋が開通した。丸亀市の最重要施策であった再開発事業は、１９８９年（平成元年）四月にA地区の再開発ビルが竣工したが、駅正面のC地区はキーテナントが決まったものの一部の地権者との交渉が難航し、着工に至らなかった。また、その他の三地区の再開発事業も着工されなかった。１９９０年（平成二年）三月に駅前地下駐車場が竣工した。



MIMOCA の落成式
左四人目から堀家前市長、猪熊先生、片山市長、真鍋市議会議長

美術館は1991年（平成三年）三月に正面の壁画「創造の広場」の除幕式が行われた。そして六月に美術館が竣工し、養生期間を経て十一月二二日丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が落成した。落成式の出席者は約八百人であったが、そのうち東京など遠来の客も三百人近く出席し、都会的な雰囲気のする式典だとの感想が聞かれた。式典では新しく就任した片山圭之市長が「半端でない素晴らしい美術館ができた。『猪熊美術館』を地方からの情報、文化の発信基地として世界に美を主張していきたい。」とあいさつ。また、猪熊先生は「これまでの人生でこんなにうれしい日はなかった。今後も未来に向かって精魂を尽くして新たな創造を進め、美術館に納めたい。」とあいさつをされた。四月に退任した堀家前市長も猪熊先生や片山市長らとテープカットをした。

翌、十一月二三日から一般に公開されたが、約三か月間の開館記念展には県内外から五万人を超える来館者があった。

先生の作品などの寄贈

1987年（昭和六二年）に猪熊先生と堀家市長の会談で、先生が所有するすべての作品や資料を丸亀市に寄贈することが約束された。二年後の十二月、美術館の起工式に併せて、まず、千点の作品を寄贈するセレモニーが行われ、作品は、翌年一月から五回にわたって丸亀に搬送された。

1992年（平成四年）五月、ミモカを訪れた先生が、「作品や資料は整理のできたものからミモカに搬入したいと思っているが、一気にするのは難しいので、とりあえず約束を書面にしておきたい。」といわれ、丸亀市長あての文章が提出された。

その一年後、先生が急逝されたが、残された遺品のうち、すべての作品と資料類は堀家市長との約束どおりに寄贈された。さらに、先生の





猪熊先生のハワイのアトリエ（13F）

収集品、使用されていた家具調度品のほか著作権も遺贈されることになった。

東京・田園調布にあった遺品の整理作業は、前年、先生が市長あての寄贈文章を作成したとき、同席していた美術館の荒井相談役に、「今後の作品などの整理については荒井君にも頼みたい。」といわれていたことから、荒井相談役を中心に行われた。多数の作品と膨大な資料、書籍類などを整理して、大型の美術専用車と貨物自動車でミモカに搬入した。

また、ハワイ・ホノルルのアトリエにも多くのものが遺されていた。それらを引き取るために現地に出向いた。ハワイのアトリエはホノルルの歴史と文化が感じられるカカアコ地区にあった。マンション十三階のアトリエからの眺めはすばらしく、右手奥にはワイキキのホテル群が望め、左手には美しい山並みが続いていた。すべての部屋がきちんと整理されていて、アトリエはすぐに仕事にかかれるようになっていた。イーゼルには描きかけの「裸子」の絵が立てかけられていた。すべての遺品は日通の現地スタッフによって丁寧に梱包され、日本に空輸された。

寄贈された先生の作品はカンバス類、デッサンなどを合わせて、二万点を超えた。それらの作品の評価額を先生が亡くなる直前数年の実販売価格などを基に試算した。総評価額は約百八十億円になった。

寄贈品の中には先生が収集したほかの作家の作品もあるが、先生の保有していた資料や書籍類にも貴重なものが多数含まれていて、それらの整理と研究もミモカの重要な役割となっている。

美術館の運営と財団の設立

はじめて猪熊先生を訪ねたときに、まずいわれたのは美術館を運営する難しさ、特に財政的なことであった。その後、何度か念押しもされた。丸亀市も近隣の同様な施設を調査して、おおよその状況は把握していた。また、懇談会の委員でもあった大原美術館の藤田館長と京都国立近代美術館の小倉館長からも「観光地や大都市などごくわずかな美術館を除いて、企画展などが黒字になることはまずない。まして、現代美術の展覧会となるとより厳しい。」との話があった。特に、藤田館長は国内の約四〇〇館が加盟する美術館連絡協議会の会長もされ、美術館の実情をよく知っておられた。両館長から色々と話を聞いた第一助役は、市長に、「美術館はほかの公共施設と違って、事業を行う施設なので、将来にわたって展覧会などが積極的に行えるように基金を積み立てておくべきだ。」と進言し、自ら丸亀競艇の責任者である第二助役に原資の捻出を頼んだ。

１９８９年（平成元年）十二月議会に競艇の収益金を財源とする美術館運営基金条例が提案された。提案理由は、「市立美術館が長期的に積極的な運営を図り、市民の芸術文化の振興に寄与できるようにする」というものであったが、丸亀市が公共施設の運営のために基金を設けたのは初めてのことである。基金は二年間積み立てられ、基金の総額は二〇億円を超えたが、その後、預金金利が大幅に低下したこともあって、一般会計の財源不足を補填するために、他の基金とともに取り崩されることになった。

美術館の管理運営は丸亀市の直営でスタートしたが、美術館の事業内容は、展覧会の開催、ミュージアムショップやカフェの営業などほかの行政にはない特異な業務も多く、積極的な事業展開を図るためには、より柔軟性が発揮できる体制が必要と考えた。また、管理運営の効率化も重要な課題であった。そこで、開館の翌年から財団化の検討を始めた。

猪熊先生も早い段階から、美術館が自立した柔軟な運営を行うためには財団化がよいのではないかと話されていた。先生は、美術館が財団化されれば、自分の資産で基金をつくり、若手作家の育成や子どもたちの支援、さらに美術館スタッフの教育を行いたいと考えておられた。

財団が設立できる見通しになったので、そのことを先生に報告すると、「財団化はミモカにとって良いことだ。今後の仕事がスムーズに運べるようにしっかりとした内容にしておいてほしい。」といわれた。

丸亀市が全額出資する財団法人の設立申請書を香川県に提出した。当時、財団法人の中には、資金不足などで休眠している法人もあったことから、認可の審査は厳しく、審査の過程では財団の財政基盤について、「事業内容をみると財団が存続するためには、丸亀市の支援が不可欠であるが、将来にわたって丸亀市が財団の運営を支援することが明確でない」と指摘された。そこで、財団設立者に対して、丸亀市が将来にわたって事業活動を支援する確約を行い、それを県に提出した。

１９９３年（平成五年）四月、財団法人ミモカ美術振興財団が発足した。

財団の設立を喜んでおられた先生は、設立の翌月に急逝され、ご自分が主導して実施しようと考えておられた支援策は実現できなかった。ただ、先生の生前の意思を受けて、先生の資産の一部と著作権料が「猪熊基金」としてミモカに託されることになった。



猪熊弦一郎《題名不明》1992 年

三つの美術館の不思議な縁

「土門拳記念館」、「猪熊弦一郎現代美術館（愛称ミモカ）」、「ニューヨーク近代美術館（愛称モマ）」、三つの美術館には不思議な縁がある。

丸亀市の美術館計画は、旅行雑誌「旅」に掲載されていた「土門拳記念館」の話題からはじまった。猪熊先生と話し合いを重ねながら、他の美術館の見学をした。

１９８７年（昭和六二年）五月、世田谷美術館（東京都）を見学した後、部長とともに話題になった山形県酒田市の土門拳記念館に向かった。「土門拳記念館」は１９８３年（昭和五八年）にオープンした写真家土門拳の美術館であった。美しい自然林となだらかな丘を背景に、前面に人工池を配し、鳥海山の眺望も利いて豊かな自然環境と建物が見事に調和したすばらしい美術館であった。また、世界的な彫刻家イサム・ノグチが設計した水の流れる庭園と、そこに置かれた彫刻「土門さん」も印象的なものであった。この記念館は後に、優秀な建築に与えられる「吉田五十八賞」、「日本芸術院賞」を受賞している。

記念館を見学して二か月後、猪熊先生から連絡があり、お宅を訪問した。この日、先生ご夫妻から「丸亀市の美術館計画への協力を前向きに考えたい。」との話があった。色々と話をされている中で建物の話になり、「私の知人に優秀な建築家がいるので、そのときになれば紹介したい。」と一人の建築家の名前を出された。驚いたことに、その建築家は、土門拳記念館を設計した谷口吉生さんであった。後に、谷口さんに設計を依頼することになるが、土門拳記念館のことが市役所内で話題になっていなければ、「猪熊美術館」の誕生はなかった。その記念館の設計者が「猪熊美術館」を設計することになったのである。単なる偶然とは思えないような不思議な縁を感じた。

東北・酒田市と四国・丸亀市の不思議な縁は、さらに米国・ニューヨークにつながることになった。

１９９３年（平成五年）ニューヨーク近代美術館（モマ）の建築部チーフキュレーターのテレンス・ライリーさんが予告なしにミモカを訪れた。モマは米国を代表する美術館のひとつで、近代、現代の珠玉の名品のほか建築や商品のデザイン、ポスターなど新しい表現も多数収蔵している美術館である。後に分かったことであるが、ライリーさんはモマが大規模な増改築工事を行うにあたって、設計コンペティションに招待する建築家を世界中から探していたのだ。

スタッフに通訳を頼んで館の内外を案内した。見学を終えたライリーさんは、ファサード（建物正面）やおおらかな空間、さらに周辺の街との関連などを評価し、「す



土門拳記念館　山形県酒田市



MIMOCA



MoMA（モマ / ニューヨーク近代美術館）　米国・ニューヨーク

ばらしい美術館だ。」といわれ、「設計した建築家はだれか。」と尋ねられた。谷口さんの名前を告げたが、ライリーさんはニューヨーク・タイムズ紙に掲載されたミモカの小さな写真を見て訪れたのだという。有名無名に関係なく設計された建築物本位での人選をしていたのである。ライリーさんが訪れた三年後の１９９６年、谷口さんが世界で一〇人の建築家に選ばれ、ニューヨークに招待された。

モマの設計者選考は第一次選考、第二次選考、さらに審査委員の現地視察、そしてモマの幹部や建築家などによる長時間の最終面接を経て、翌１９９７年、谷口さんに決まった。谷口さんがモマの設計者に選ばれたことは大きな話題になり、ニューヨーク・タイムズ紙日曜版の表紙全面に谷口さんの顔写真が掲載され、ミモカのことも紹介された。

猪熊先生は１９５５年から二〇年間に及んだニューヨーク時代、一週間に一度はマンハッタンの大通り、マジソンアベニューに点在する十数か所の画廊を見て回り、ときにはニューヨーク近代美術館（モマ）、メトロポリタン美術館、グッゲンハイム美術館に足を延ばすことがあったという。特にモマは先生が生涯で最も多く訪れ、展覧会に出品したこともあるお気に入りの美術館で、日本から訪れた知人や留学生にもモマを見学することを勧め、案内役として度々同行した。

先生にモマのキュレーターがミモカを訪れて称賛されたことを報告すると、「とてもうれしいニュースだ。」と大変喜ばれた。その二週間後に急逝され、谷口さんの朗報を知ることはできなかった。谷口さんと共に造ったミモカが評価され、それが契機になって、先生の愛したモマの設計者に谷口さんが選ばれたのである。これも単なる偶然とは思えないような不思議な縁である。

心友イサム・ノグチ

猪熊先生は生涯、数え切れないほどの友人を持ったがイサム・ノグチさんは特別な存在であった。世界的な彫刻家と日本洋画壇を代表する作家との交遊は、先生によると、１９５０年、ほぼ面識のなかったノグチさんが突然、猪熊邸に現れ、日本ではじめてとなる個展の作品を制作するまでの四〇日間、食客となったことからはじまった。その間、先生夫妻はベットルームをノグチさんと弟のミチオさんに譲り、自分たちはアトリエの床に毛布を敷いて寝たという。当時、ノグチさんは日本語をほとんど話せず、先生夫妻は英語ができなかったので、意思疎通は片言のフランス語であった。ノグチさんの言動は激しく、先生は、「まるで、いつも手に負えない少年がいるみたいだった。」と述懐している。猪熊夫妻の面

倒見の良さはつとに知られていたので、頼るところのなかったノグチさんにそのことを教えた人がいて、猪熊邸を訪れたのだという。

その後、二人の交遊は１９８８年にノグチさんが亡くなるまで四〇年近く続いた。先生はノグチさんとのことを、「私がイサムと日本で過ごした後、ニューヨークに行き二〇年間、その後ハワイに毎年冬を過ごした十五年の間、イサムとの交遊は深く、目から、口から、手から、絶えることなく続き、日々深まるばかりであった。私は、この永い間に彼からどれだけのことを学ぶことができたか、数えることができない。それは、石を作ることだけではない。一つの見えない空間の中に新しいものを発生させる術そのものである。」と記している。１９５６年にはノグチさんに自分の故郷香川や知事の金子さんを紹介している。そのことが、後に、ノグチさんのパートナーとなる和泉正敏さん（前・イサム・ノグチ日本財団理事長）との出会いや牟礼（現・高松市牟礼町）にアトリエを構えることにつながっていった。

先生にとってノグチさんは「親友」を超えた存在であった。そのノグチさんが亡くなった後、ノグチさんの作品を自分が選び、ミモカの空間にディスプレーしたいという強い思いがあった。幸いにもニューヨークのイサム・ノグチ財団と日本のノグチ財団設立準備委員会の協力によって望みが叶えられた。特に、和泉正敏さんの全面的な支援はこのうえなく大きなものであった。

１９９２年八月、先生は牟礼のアトリエを訪ね、展覧会のために未完成を含めて三九点を選んだ。そのときのことを、「久し振りに牟礼の工房を訪ねて沢山の作品群の中を歩きながら、イサムは石の中に黙って住んでいることを知ったが、今、この展覧会のためにイサムを持ち出すことは、まったく恐ろしいような悦びであった。」と記している。さらにミモカでの展示について、「私は今、和泉正敏さんと共にイサムの石をディスプレーしている。重い石は少しも重力を感じさせない。この空間の中に石は思いのままに動き、安定してくれる。イサムは、今、ここに来ている。そして私達をヘルプしてくれている。」と記している。先生は自分の近作二五点を同時に展示したが、「イサムが一つ一つの素晴らしい作品を誕生させて行った時、私も私なりに精一杯の仕事をして生きてきた。」と記し、「同じ時に並べることができた私の絵も悦びにふるえている。」



作品を選定する猪熊先生（牟礼のイサム・ノグチのアトリエ）
©INFGM / ARS-JASPAR

とも記している。ミモカの開館一周年に、先生の卒寿記念展として開催された二人展「心友イサム・ノグチとともに」は、先生でなければできないすばらしい展覧会であった。

展覧会の作品をアトリエから運び出す二日前の十一月十七日はノグチさんの誕生日であった。牟礼のアトリエでは毎年、ノグチさんの誕生パーティーが盛大に開かれていたが、ノグチさんが亡くなった後も親しかった人たちが集まり、お祝いをしていた。この日、先生はノグチさんのパーティーに初めて参加された。集まった人たちとノグチさんの誕生日を祝われたが、その丁度六か月後の五月十七日に亡くなられた。

先生は亡くなる二日前までミモカに滞在していた。元気に帰京された翌日、知人から紹介されたアメリカ人の二世の方が、「イサム・ノグチの話を聞きたい。」と訪れていた。先生はノグチさんの話になるといつも熱くなったが、このころ、先生にとって最大の関心事は牟礼のアトリエの行く末のことであった。ノグチさんが亡くなった後もアトリエがそのままの姿で美術館として残ることを切望していた。この日も来客とその話になり、アトリエは掛け替えのないものだということが、言葉の関係もあって相手にうまく伝わらないもどかしさがあったのか、ひどく興奮していたという。話の途中で体の不調を



「心友イサム・ノグチとともに」展示風景（MIMOCA, 1992 年）　©INFGM / ARS-JASPAR

訴え、病院に運ばれたが翌朝帰らぬ人となってしまった。

イサム・ノグチさんの計画

1988年秋、イサム・ノグチさんは海外での仕事や高松空港に設置するモニュメントの制作など多忙な日々を送っていた。そんなある日、ノグチさんは谷口吉生さんに掛けた電話で、谷口さんが猪熊先生の美術館の設計をはじめたことを知った。ノグチさんは、すぐに猪熊先生に電話を掛け、美術館ができることを祝福して、自分も美術館の仕事を手伝いたいといわれた。仕事を簡単には引き受けなかったというノグチさんが、ともかく手伝いたいといわれたのである。先生にとってノグチさんが特別な存在であったように、ノグチさんにとっても先生は大切な人であったのだろう。和泉正敏さんによると、ノグチさんは先生の美術館ができることを喜び、仕事を手伝うことを楽しみにされていたという。

しかし、そのわずか後の十二月三〇日、ノグチさんは極寒のニューヨークで亡くなった。ノグチさんが楽しみにしていた計画は幻に終わった。ミモカは国内外から高く評価されているが、もし、ノグチさんの計画が実現していれば、さらに、多くの人を驚かせるようなものができていたことは想像に難くない。和泉さんも「実現していたらすごいことになっていたと思う。」といわれた。

ノグチさんが亡くなって四年後の夏、猪熊先生は展覧会の作品を選ぶために、牟礼のアトリエを訪れていた。アトリエには沢山の作品のほかに、和泉さんがノグチさんのために集めていた自然石が幾つかあった。和泉さんによると、ノグチさんはそれらの石をよく眺めていたという。先生はそのうちのひとつをミモカの滝の前に置きたいといわれた。後に、その自然石（玄武岩）は、和泉さんのご厚意で、ミモカ三階の水の流れる静かな空間に置かれた。



滝の前の自然石（MIMOCA）

猪熊先生の最後の五日間

先生は1988年に奥様を亡くされてからは、正月を東京で過ごした後、ハワイに行き、暖かくなってから東京に帰るという生活を続けていた。

1993年も、年が明けた一月二〇日にハワイに立ち、自炊生活をしながら十三点のタブロー（絵画）を仕上げ、三か月後の四月二〇日に帰国した。その三週間後、半年ぶりにミモカを訪れた。先生の丸亀での滞在はいつも三日間程度であったが、このときは五日間滞在され、帰京した二日後の早朝、亡くなられた。後から思うと、それまでになかったようなことの多い五日間であった。

五月十一日、先生は久しぶりに訪れたミモカのたたずまいを懐かしまれたが、この訪問で特に楽しみにされていたのは、若いころの代表作である二つの作品の修復が終わり、五〇年ぶりに再会できることであった。いずれも二〇〇号の大作であったが、戦争中に戦火に遭わないよう防空壕に疎開し、それ以降もそのままの状態でアトリエに置かれていた。長い間、筒状に巻かれていたので、油彩の油が固まり広げられない状態になっていた。元に戻るか心配されていたが、見事に蘇っていた。先生はそれを見て、「傷みのひどいところもあったが、見違えるようにきれいになった。失われなくて本当によかった。」と喜ばれ、修復家の高い技術に感激された。二日後から始まる展覧会の展示作業を楽しみに、宿泊先のホテルに向かわれた。





作品の展示を指示する猪熊先生（MIMOCA, 1993年）

五月十二日、先生がミモカに着いたとき、展示室には先生が前もって選んでおいた作品が並べられていた。最初に、修復された二点を含め八点の作品が先生の指示で二階の展示室Bにゆったりと掛けられた。いずれの作品も若き日の力作で、先生は力足らずのところがあるといつつも、力一杯描いていると懐かしそうに話された。また、三階の展示室Cにはニューヨーク時代の集大成といえる作品三〇点が、先生の指示のもと展示

された。作品の間隔をゆったりと取り、空間を考えた展示はスタッフにとっても勉強になるものであった。さらに、二階の展示室Aにも十八点の作品が展示された。先生は疲れも見せずにテキパキと指示され、すべての展示を無事に終えられた。満足された様子であった。

五月十三日、ミモカに着いた先生は、開館前の静かな展示室をゆっくりと巡りながら、展示風景を盛んに撮影された。二階の展示室Aで、「少年」と題した作品を眺めていたとき、突然、「本島へ行ってみたい。」といわれた。本島（現・丸亀市本島町）は、先生が東京美術学校に入学した年の夏、肋膜炎を患って一年間休学し、療養生活を送った島である。「少年」は療養中に描いた作品で、モデルは本島で見かけた少年であった。

昼前、近くの丸亀港から高速艇で本島に渡った。先生にとっては七〇年ぶりの本島であったが、すっかり様変わりして昔の面影はなかった。プール付きのホテルが建ち、ヤシの木も植えられていて、「まるで外国に来たようだ。」といわれたが、目の前に広がる瀬戸大橋の景観にはことのほか感激されていた。島のホテルで昼食を取りながら、療養中の日々を昨日のことのように話された。島から帰ると、片山市長に会いたいといわれた。急な話であったが会うことができた。ミモカのことを市長に頼むことが目的であったが、ミモカが東京はもちろんハワイでも評判がよく、ハワイからも知人や友人がたくさん来ていることを話された。また、本島へ行ってきたことを話し、本島の夏祭りに女装して参加したとき、その姿があまりに女性そのものであったのか、何人かの島の青年に誘われたことなどを楽しそうに話された。


猪熊弦一郎《少年》1922年

五月十四日、朝、これからの展覧会の打ち合わせをしたが、突然、思い出したように、古くからの知人で一月に九五歳で亡くなった南茂治さんのお宅に行きたいといわれた。先生が丸亀中学のころ、母親が亡くなり孤独な少年になることを心配した父親が、自分の勤めていた善通寺教員養成所の生徒を二人、書生として同居させたが、そのうちの一人が南さんで、最晩年まで交流があった。強い雨の中、南さん宅を訪れてユリの花を霊前に手向けられた。

前日十三日の朝、迎えの車の中で、みんなに話がしたいといわれた。先生がスタッフ全員に話をするのははじめてのことであった。開館中のため、半数ずつに分けて、十三日と十四日に先生の話を聞くことになった。話

はハワイでの自炊生活のことに始まり、パリ時代のこと、美術館のこと、子どもの感性を高めることの大切さ、展覧会とお金のことなど多岐にわたったが、その中で美術館の役割について、「**現代の美術館は、建物と一体になって人々にどうやって安らぎを与え、本当に美しいものはどういうものかをわかってもらうために育ち、生きて行かなければならない。だから、人々が美術館の雰囲気に浸ることによって、生きる喜びを感じて、心が安らぎ、美しいものが分かる。そういうことから、周りの人を愛し、家庭を愛し、自分のまちを愛する心が生まれてくるんです。そのためには、本物に触れる機会を多く持たなければならない。特に子どもたちには、美術館の活動を通して、美しいもの、新しいものに共感できる豊かな感受性と優しい気持ちを持った人間に育ってほしいんです。その手助けをするのが美術館の役割なんです。**」と話され、また、現代美術のことについて、「**アートってものはその時代の答えであると同時に、その人の答えなんです。だから私がレンブラントの絵が好きだとか、もっと先でルノワールの絵が好きだとか、もっとさかのぼって、ボッティチェリの絵が好きだとか、ジョットの絵が好きだって、それを私が描くことはできないんです。あの時代だからジョットがあったし、あの時代だからルネッサンスだからボッティチェリがあったわけです。その時代を表現してみんな死んでいるんです。ですから、猪熊さんは、この現代の日本をどう表現して死ぬかっていう責任があるんです。それがコンテンポラリー、現代、コンテンポラリーアート。この美術館の名前になった一番重要なポイントだから、みなさんそれを考えとかなきゃいけない。ただなんでも絵をここへ並べるんじゃないんです。コンテンポラリー、今の、表現したものをここへ並べるっていう特殊な美術館を造っているんです。だから、これからフューチャー（未来）に向かって、どういうふうに作家が方向付けて、今にないものを発見していくかっていう、一番大事な、一番難しいことの結果を見せる美術館であってほしいんです。**」と話された。最後に、「今後、いろいろな苦難があると思いますが、長く続けていかなければいけません。皆さんにはミモカを盛り立ててほしい。」といわれ、約一時間半の話を終えられた。

ホテルに向かう車の中で、「みんなに大事な話ができて本当によかった。」といわれ、安心されたような様子であった。

五月十五日、滞在最終日、先生がミモカに着かれたとき、近くの東幼稚園の園児たちが美術館前のゲートプラザに遊びに来ていた。先生はしばらく、楽しそうに子どもたちの相手をされていた。先生は大人はもちろん、子

どもに対するときにも分け隔てせず、いつでも誰にでも同じように接しておられた。先生は本当に人柄だった。

高松空港発十五時〇五分の飛行機で帰京することになっていた。途中で両親の墓参りをされた。両親の墓は坂出市加茂町にあった。墓は小中学生のころ同居していたこともある七歳下の従妹が守ってくれていた。墓参用の花はいつもその従妹が用意していたが、この日は初めて「ボクが花を買う。」といわれ、丸亀駅前の花屋で菊の花を買って従妹とともに両親の墓前に手向けられた。

高松空港に着くと、先生を見送りに来た人が何人かいた。それぞれの人に声をかけ、握手をされた。にこやかに手を振りながら搭乗ゲートに向かわれた。

先生は本島での話の中で、「やりたいことがたくさんある。」といわれ、具体的なことも話されていた。九〇歳とはとても見えないお元気な様子に先生の新しい展開を期待し、頼みにしていた。その先生が突然、逝かれた。先生には多くの心残りがあったと思われるが、することをされ、いっておきたいことはいわれて逝かれたように思える五日間であった。

全国の美術館ベスト五位

猪熊先生は「世界に通用するような美術館を造りたい。」と話していた。モマに認められたことで世界に通用することが分かったが、国内においても高い評価を得ている。

２０１６年（平成二八年）、東京・上野の国立西洋美術館が世界遺産に登録されることを契機に、日本経済新聞社が土曜版の日経プラスワンで、全国で一千を超える美術館の中から「建物が魅力的な美術館・ベスト一〇」をアートと建築の専門家一〇人に選んでもらった。評価は、三人以上から推薦された二八施設の中から「環境との調和」と「収蔵品や展示品の魅力」を重視してベスト一〇が選ばれた。結果、ミモカは駅前に立つ大胆なファサード（建物正面）と落書きのような壁画、のびやかな建築空間などが評価され、全国ベスト五位に選ばれた。



MIMOCA

おわりに

猪熊先生が、「神様がつくられたプランというものは前世からちゃんとできあがっているのだろうか。」といわれたことがある。ミモカの誕生を振りかえるとその言葉に思わず頷きたくなる。

猪熊先生の全面的な協力、故藤井久美さんからの貴重な用地の提供、そして、競艇収益金の大幅な増収。様々な幸運が絶妙のタイミングでシンクロナイズして、全国から注目を浴びる美術館が新しい丸亀の顔として生まれた。そこには当時のリーダーのまちづくりへの熱い思いもあった。

猪熊先生は、「アートを通して、丸亀市が日本の丸亀に、香川県が世界の香川になること」を願っていた。

四国新聞社の明石安哲さんは、２０１７年に連載コラム「うどん県クロニクル（年代記）第二章・アートの時代」のなかで、「戦後香川のアートの歩みは猪熊なしにはありえない。」と記し、コラムの最終回を「画家猪熊弦一郎が招いた丹下（丹下健三）とイサム（イサム・ノグチ）によって種をまかれたアートの時代は、デザイン知事金子正則の手で昭和につぼみをつけ、平成に花を開いた。次は果実を収穫する時代になるだろう。猪熊は香川のイサムを「奇跡」と呼んだが、本当に驚くべきは猪熊の夢を次々に実現する風土がこの讃岐にあったことだ。奇跡はこれからも起き続ける。人々が夢を忘れない限り。」と結んでいる。

ミモカには猪熊先生をはじめ多くの人の思いや願いが託されている。

美術館の沿革

1987年（昭和六二年）
十　月　丸亀市が猪熊弦一郎美術館の建設を発表する

1988年（昭和六三年）
一　月　美術館建設懇談会を設置する
三　月　鉄道高架事業が竣工する
　　同日ＪＲ丸亀駅舎が完成する
四　月　瀬戸大橋が開通する
七　月　美術館建設懇談会の意見書が提出される
八　月　美術館建設基本構想を策定する
九　月　基本設計を委託する
十一月　美術館建設準備室を設置する

1989年（平成元年）
二　月　基本設計が完了する
三　月　実施設計を委託する
五　月　基本設計変更案を決定する
九　月　実施設計が完了する
十一月　美術館建設工事契約を締結する
　同月　美術館建設工事に着手する
十二月　美術館建設工事の起工式が行われる
　同月　新しい高松空港が開港する

1990年（平成二年）
　三　月　丸亀駅前地下駐車場が竣工する

1991年（平成三年）
三　月　壁画「創造の広場」の除幕式と定礎式が行われる
三　月　ＪＲ丸亀駅前広場が完成する
六　月　美術館建設工事が竣工する
九　月　美術館条例を制定する
十　月　美術館の愛称が「ＭＩＭＯＣＡ（ミモカ）」になる
十一月　美術館の落成式が行われる
　　一般公開（二三日）

美術館の受賞歴

1992年　第二六回ＳＤＡ（サイン・デザイン）賞
1993年　第三四回ＢＣＳ（建築業協会）賞
1994年　第七回村野藤吾賞
1996年　第五回公共建築賞・特別賞



猪熊弦一郎先生のこと（年譜）

１９０２年（明治三五年）高松市中新町に生まれる。父、八太郎が小学校の教師をし、後に香川県の教員養成所の教官を勤めたことから、仕事柄たびたび転勤したため、毎年のように転校した。幼稚園は高松から多度津、丸亀と二度、小学校は丸亀から多度津、坂出、善通寺と三度転校している。

小さいころから絵を描くことが大好きであったが、ひとつのことをとことん突き詰める凝り性のところもあり、その性格は生涯変わらなかった。絵に熱中するようになったのは八歳のころである。当時、東京美術学校彫刻科の学生であった従兄の中村武平からたびたび絵の道具が送られてきた。なかでも、武平からもらったスケッチブックは東京・上野動物園の動物や街中を歩く女性の姿が生き生きと描かれており、絵本などない時代に絵のすばらしさを教えてくれた貴重な宝物であった。小学校の上学年になるにつれ絵はメキメキと上達し、転校するときは次の学校で「今度、絵の上手な子が来る。」と教師の間で噂になっていたほどであった。小学六年生になると、先生に代わってクラスメイトに絵の描き方を教えていた。当時の同級生は「子供心に猪熊君は絵の天才だと思ったが、それでいて茶利（こつけい）なところもあって、みなに好かれる良い性格の人だった。」と話している。


幼稚園のころ、母マサヱと


1920年　丸亀中学４年

中学は当時住んでいた善通寺町（現・善通寺市）から丸亀中学（現・丸亀高校）に五年間、片道八キロの道のりを自転車で通った。中学一年生の冬、大阪の病院に入院していた母マサヱが、大阪に住む従兄の中村武平のアトリエで亡くなった。武平に「描け！」といわれ、泣きながら生前の面影の薄い母親の顔を描いた。

父一人子一人の生活が始まったが、丸亀にあった陸軍の東練兵場で初めて見た飛行機のことや丸亀城の森で学校に隠れて弾いたバイオリンのことなど、丸亀は中学生時代の思い出が詰まった地であった。

１９２１年（大正一〇年）丸亀中学を卒業して上京、翌年、東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科に入学する。同期に、小磯良平、荻須高徳、中西利雄、山口







上段左 :1926 年　帝展初入選の頃
上段右 :1930 年　猪熊夫妻（帝展入選作品の前）
下段：1936 年　新制作派協会設立会員（前列中央は藤島武二先生、後列右から三人目が猪熊先生）

長男、岡田謙三、牛島憲之などがおり、文化勲章受章者や海外で活躍した者も多く、明治二二年に東京美術学校が開校して以来の秀才ぞろいのクラスだといわれている。美術学校では当時、学生達に一番人気があり、後に「生涯の師」と仰ぐことになる藤島武二の教室に入った。藤島は週に二回教室を訪れたが、学生達の絵を見て、いつも「デッサンが無い。」の一言しかいわなかった。この一言に大変なショックを受けたが、自分なりに考えて、デッサンとは正確に物を描くことだと思っていたが、物を本当に理解したかどうかという答えがデッサンなんだと思い当たった。絵画はそのものを描くのではなく、そのことを描くのだと悟り、その教えを生涯大切にした。

１９２６年（大正十五年）当時、日本最大の美術展であった帝国美術院展覧会（帝展）に後に妻となる片岡文子を描いた「婦人像」が初入選し、その後、１９３３年（昭和八年）まで八年間入選を続けた。１９２９年（昭和四年）には「座像」が、１９３３年（昭和八年）には「画室」がそれぞれ特選になり、それ以降は無鑑査となった。１９３５年（昭和一〇年）政府が芸術統制を強めるために帝展の改組を行ったことで若手の特選受賞者を中心に反対運動が起こり、帝展への出品をボイコットする。翌年、政府は再改組を行い、大半の作家は新文展に戻るこ

とになったが、その動きに反発し「政治的抗争を排除し、芸術運動の純粋化」をスローガンに、志を同じくする小磯良平、佐藤敬、三田康、中西利雄、内田巌、伊勢正義、鈴木誠、脇田和とともに新制作派協会を設立し、美術界に新風を起こした。恩師藤島武二は協会設立の大きな支えとなった。藤島は洋画壇で自らが孤立することも恐れず、理想に燃える若者たちを支援し、「しっかりやれ」と応援してくれた。それは単なる師弟の情ではなく、彼らの芸術理念と活動に共感し、評価してのことであった。藤島自身も新制作派協会の第一回展に五点の作品を賛助出品し、懇親会では感激のあまり涙したという。

１９３８年（昭和十三年）夫人を伴い、横浜港から念願であったパリに向かう。当時の画家にとってパリ行きは夢ではなく、生涯の目的のようなものであったという。美術学校の同期生には裕福な家庭の子弟が多く、卒業後、間もなく親友の小磯良平、荻須高徳、中西利雄などが次々と渡欧して、ひとり取り残されたようになった。経済的なことで渡欧までに一〇年の歳月を要したが、その間に新制作派協会の立ち上げもあって、必死で勉強してのパリ行きであったことが様々なことを吸収するうえで幸いした。渡欧で最大の収穫はマチスに助言を受けたことである。マチスに絵を見てもらった時、「お前の絵はうますぎる。」といわれた。マチスから自分の絵になっていないといわれたと思って、本当に恥ずかしくなったという。うまく描くことは人によく見てもらいたいと思って描くことで、思ったことを素直な、虚飾のない姿でカンバスにぶっつけることが一番大事なことだと思い知らされた。マチスのこの言葉は一生を通じて最も大きな教訓になった。マチスやピカソに会うなど充実した日々であったが、１９３９年（昭和十四年）第二次世界大戦が勃発し、パリにも危険が迫っていた。画家の藤田嗣治夫妻と戦火を逃れてパリ郊外のレゼジー村に移住するが、翌１９４０年（昭和十五年）戦況はますます激化し、やむなく帰国を決意する。同年六月十四日パリ陥落の日、マルセイユから最後の避難船「白山丸」で帰国の途についた。写実の代表作と言われる「マドモアゼルM」は、ドイツ軍の空爆音が響く中、命がけで描



1939 年　ニースのマチスのアトリエ
（後列中央がマチス、右端が猪熊先生）

いたフランス滞在最後の作品である。

１９４１年（昭和十六年）陸軍から中国南京方面へ文化視察のために派遣され、翌年にはフィリピン、さらにビルマの戦線に派遣される。従軍画家に選ばれたのは猪熊の身を案じた恩師藤島武二と朝日新聞記者竹田道太郎の働きかけがあってのことだった。戦地の劣悪な環境と食糧事情によって腎臓を患う。帰国後、手術を受けるが片方の腎臓を摘出する大手術となり、九死に一生を得た。１９４４年（昭和十九年）退院後、神奈川県吉野村（現・相模原市）に藤田嗣治、荻須高徳、中西利雄らと疎開する。

１９４５年（昭和二〇年）終戦後、田園調布純粋美術研究室を開設して、後進の指導に当たる。多くの雑誌、新聞の連載小説の挿絵を描き、１９４８年（昭和二三年）一月号から「小説新潮」の表紙絵を描き始め、以降、創刊四十周年記念号（１９８７年九月）まで四〇年間、途中で大病を患ったこともあったが欠けることなく描き続けた。１９４９年（昭和二四年）猪熊の尽力により、新制作派協会に建築部が創設される。建築家の山口文象、丹下健三、前川國男、岡田哲郎、谷口吉郎、吉村順三、池辺陽が会員になる。建築家との交流が深まり、建築と融合した壁画を多数制作する。１９５０年（昭和二五年）慶応義塾大学学生ホール（設計・谷口吉郎）の壁画「デモクラシー」と名古屋丸栄ホテルの壁画「愛の誕生」で第二回毎日美術賞を受賞する。この年、三越のクリスマス用の包装紙「華ひらく」をデザインする。好評で翌年から常時使用されるようになる。１９５１年（昭和二六年）東京・上野駅中央ホール（現・中央改札）の大壁画「自由」を日本光学工業（現・ニコン）の工場跡地で制作する。近くで猪熊邸に同居していたイサム・ノグチが彫刻作品を制作していた。イサム・ノグチとの交流は１９８８年（昭和六三年）にノグチが亡くなるまで続いた。

１９５５年（昭和三〇年）長年の画業を見直し、新しい発見をするために再度懐かしいパリに遊学することを決心し、友人の勧めもあってニューヨーク経由で出発する。アリゾナ砂漠を車で横断し、サンタフェ、デンバーを経て、空路ニューヨークに着いた。当時の東京にはなかった高層ビル群や街並みの異様さに圧倒され、活気にあふれる街の様子や人々の底知れぬエネルギーに魅了された。ニューヨークの街がすっかり気に入ってしまい、旅行者として訪れたニューヨークに住むことになった。人生を大きく変える一大決心であったが、全力を挙げて勉強をし直してみようという勇気が湧いてきたという。五〇歳を過ぎていたが、それまでの評価や名声をすべて捨てての果敢な挑戦であった。ニューヨークでの滞在

は病気のためにやむなく帰国するまで二〇年間に及ぶ。１９５６年（昭和三一年）ロックフェラー三世夫人の紹介で、ウィラードギャラリーで新作による個展を開く。以降、同ギャラリーの所属作家として計一〇回の個展を開いたほか、多くの展覧会に出品したが、作品に具象の影はなくなり、色と形で表現する純粋な抽象形態になった。１９５７年（昭和三二年）日米協会運営委員、日本総領事館顧問、日米貿易振興会（ＪＥＴＲＯ）顧問を委嘱され、日米の文化交流にも尽力する。ニューヨーク滞在中、川端康成、三島由紀夫、大宅壮一、大佛次郎、有吉佐和子、平林たい子、棟方志功など日本からの訪問者が後を絶たず、また、イサム・ノグチ、ジョン・レノン、オノ・ヨーコのほか日本の留学生まで各界、各層の人達が猪熊の九五丁目のアパートを訪れて交流した。そこは夫人の名前から「フミ・レストラン」と呼ばれ、さながら「民間大使」のようであったという。また、近隣に住んでいたマーク・ロスコ、ロバート・マザウェル、ソール・スタインバーグら作家と交流し、ジャスパー・ジョンズ、ロバート・ラウシェンバーグも猪熊のアトリエを訪れていた。









上から
1960 年
ニューヨーク 95 丁目のアトリエ
1958 年
高峰秀子と猪熊夫妻
（ニューヨーク）
1982 年　ハワイのアトリエ
1992 年　クリストと
（MIMOCA のクリスト展会場）

１９７３年（昭和四八年）展覧会のために一時帰国し、ニューヨークに戻る送別会の席上、脳血栓に倒れ東京女子医大に入院、その後、東京で静養する。１９７５年（昭和五〇年）病のためニューヨークでの活動が困難になり、アトリエを閉じる。この年から医師の勧めもあって、冬の間は静養を兼ねてハワイで、それ以外は田園調布のアトリエ（設計・吉村順三）で制作をする。病気の後遺症で左目が不自由になり、作家として大きなハンディを負ったが、南国ハワイの明るく暖かい気候や動植物などの影響もあって、鮮やかで自由奔放な作品を描くようになった。絵のモチーフはさらに多様になり、やがて地上を離れて宇宙へと広がった。

１９８７年（昭和六二年）一〇月、丸亀市が猪熊弦一郎記念美術館の建設を発表する。翌年一月、妻、文子が病のため亡くなる。六〇年を超える作家生活において、最良のモデルであり、最大の理解者であった妻を亡くし、身の置き場のない悲しみに暮れる。妻の顔が出てこないかとひたすら顔を描き続ける。やがて、顔をひとつの造形として捉えるようになってくる。人の顔も眉、目、鼻、口を別々に見ればすべて抽象形態そのものであると考え、それらを形として追求し、秩序のあるひとつの画面として構成する「顔」のシリーズが誕生する。さらに、思い出の中にあるものも抽象形態のモチーフになって現れる。晩年に多く登場する馬と鳥には少年のころの原風景があった。

善通寺の高等小学校（十三歳）のころ、教室の窓から旧陸軍第十一師団の騎兵隊が軍馬の訓練をする様子が見えた。その馬のこの上なく美しい姿が好きでたまらず飽かず眺めていたという。また、丸亀中学時代に学校から見える丸亀城の森、そこには何百羽、何千羽というゴイサギが棲んでいて、淡いブルーとねずみ色の羽をひるがえしたり休めたりしている姿は珍しく、実に美しいものであったとも。さらに、ハワイで最後に描かれたタブローの中に、はじめて案山子（かがし）が登場する。中学生のころの猪熊少年が、お百姓さんに頼まれて稲の大敵だったスズメを退治したときに、田んぼでよく見かけた一本足の案山子である。

１９８９年（平成元年）十二月、丸亀市に作品千点を寄贈する。

１９９１年（平成三年）三月、丸亀市第一号の名誉市民に選ばれ、市民証授与式が行われる。

同年十一月二三日、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（愛称ミモカ）が開館する。

１９９２年（平成四年）五月、丸亀市長に所有するす

べての作品などを寄贈する旨の文章を提出する。
同年十一月、ミモカの開館一周年に、世界的な彫刻家イサム・ノグチの作品を自ら選定し、ディスプレーも行って、企画展「心友イサム・ノグチとともに」を卒寿記念展として開催する。
1993年（平成五年）一月、「祝九〇祭・猪熊弦一郎展」で第三四回毎日芸術賞を受賞する。
同年五月十七日、東京・聖路加国際病院で亡くなる。（享年九〇歳）
同年六月二八日、名誉市民の告別式がミモカで行われる。









1993 年　最後にハワイで描いた作品
上段左：《ダボとカガシ》
上段右：《鳥達の遊び》
下段左：《飛ぶ日のよろこび》
下段右：《カガシと鳥達》

建築家・谷口吉生さんのこと

略歴

慶応義塾大学工学部機械工学科卒業
ハーバード大学建築学科卒業建築学修士
東京大学都市工学科丹下研究室
及び都市・建築設計研究所にて研究
谷口建築設計研究所所長
谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館名誉館長

主な受賞歴

アップルトン賞（ハーバード大学建築学科首席卒業）
日本建築学会賞（資生堂アートハウス、東京国立博物館法隆寺宝物館）
吉田五十八賞（土門拳記念館）
日本芸術院賞（土門拳記念館）
毎日芸術賞（東京都葛西臨海水族園）
村野藤吾賞（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館、鈴木大拙館）
ＢＣＳ（建築業協会）賞（金沢市立図書館ほか十四施設）
公共建築賞（東京都葛西臨海水族園ほか五施設）
公共建築賞・特別賞（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館）
高松宮殿下記念世界文化賞
文化功労者



1991 年　MIMOCA の落成式　右から谷口吉生さん、猪熊先生、亀倉雄策さん

著者　長原孝弘

1967 年丸亀市役所入庁

丸亀市総務部長、助役など歴任

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 館長

公益財団法人イサム・ノグチ日本財団 理事長

画像クレジット

© 公益財団法人ミモカ美術振興財団／全ての猪熊弦一郎作品

撮影：高橋章／表紙 , p8, p16, p18 下 , p19 右 , p41

撮影：木之下晃／ p4

撮影：増田好郎／ p18 上 , p29 中 , p38

撮影：彰国社／ p29 上

撮影：Timothy Hursley ／ p29 下

撮影：久居勇雄／ p50

出典：『丸亀市総合計画後期基本計画』
（丸亀市総務部企画課、1986 年 3 月発行）p98 より抜粋／ p6

出典：『まるがめ新時代　丸亀駅周辺整備事業』
（丸亀市都市開発部再開発担当、1992 年 3 月発行）p11 より抜粋／ p22

MIMOCA 開館30周年　どこにもない美術館を目指して

2021 年 11 月 20 日　発行

著　者 ――――― 長原孝弘（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館　館長）

編集・発行 ――――― 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

〒 763-0022　香川県丸亀市浜町 80 － 1

TEL 0877-24-7755

www.mimoca.org

装　丁 ――――― 前田奈津子

© 公益財団法人ミモカ美術振興財団 2021
無断転載・複製を禁じます。
Printed in Japan


MIMOCA